

以下、なぜ演劇によつて「全体感」が得られるかの追求。

~~~~~

**設問：** 「部分を部分として明確にとらへることによつて、その中に全体（過去・現在・未来といふ時間的全体：吉野注）を実感する」。その時、「過去と未来とから切り放たれた現在だけが、過去・現在・未来といふ全体の象徴として存在してゐる」  
・・・とはどう言ふ意味か。（理解できさうで理解できにくい問題）

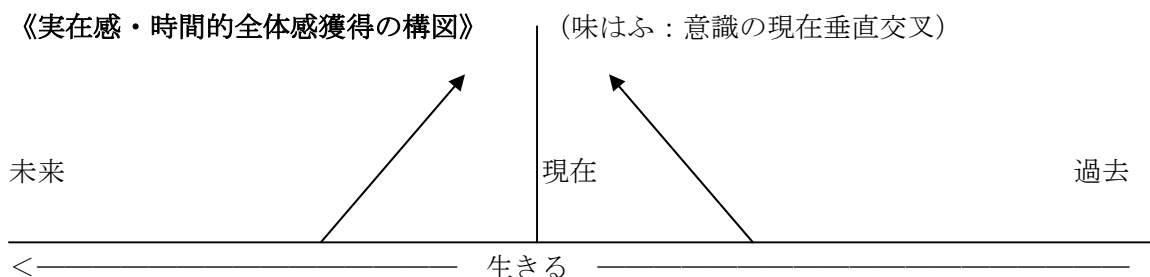
——福田氏の文作活動（「微かな一点しか火が点つてゐない」・・・「批評家の手帖」第43節より）との照合——。禅的な世界？（土屋道雄の指摘。中村保男著「絶対の探求」P52より）。

・・・例：座禅（数息観）・禅語「前後際断」（「前後暗黒化」）に通ずる問題。

「演劇とは時間芸術である」：（演劇による時間的全体感・実在感の獲得。かつ絶対への希求）

\* 時間的全体感とは何か・・・「必然感」。今まさになすべきことをしてゐるといふ実感。「なさねばならぬことをしてゐるといふ実感」。即ち宿命を演じてゐるといふ実在感。

《実在感・時間的全体感獲得の構図》



「意識は、平面を横ばひする歴史（過去・現在・未来といふ時間的継続：吉野注）といふものに垂直に交る」時、「部分（現在：吉野注）を部分として明確にとらへることによつて、その中に全体（過去・現在・未来といふ時間的全体：吉野注）を実感」する。「私たちが個人の全体性を恢復する唯一の道は、自分が部分に過ぎぬことを覚悟し、意識的に部分としての自己を味はひつくすこと、その味はひの過程において、全体感が象徴的に甦る」。将にその時、生きるといふ日常的平板さから「上に脱け出た意識は、足下の現実が時々刻々に動いてゐることを実感」するのである。「宿命/自己劇化」による絶対への演戯が、上記の実感、今まさになすべきことをしてゐるといふ実感、「なさねばならぬことをしてゐるといふ実感」を得させるのである。その時「過去と未来とから切り放たれた現在だけが、過去・現在・未来といふ全体の象徴として存在してゐる」のである。そして「前後に暗黒があればこそ、その間の時間を光として感じるこ

とができる」。

参照：[全3「人間・この・・・」(P 5 3 2) (P 5 3 3) ]、(関連及び参考評論：「醒めて踊れ」「せりふと動き」 )